訳注『風月小誌』第一号（下）

要　木　純　一

1早春霞　　千家従五位

うす霞　はつかに匂ふ　春の色を　いつか桜の　うへに見てまし

【大意】（早春の霞）まだ暖かくなっていないのに、うっすらと霞がかかっている。そのなかになんとなくほのかに春の色が感じられる。早く、春たけなわになり、桜の盛りを迎えて、その花々の上に、その色を如実に見たいものだ。

【注釈】早春霞―結題としてしばしば使われる。続後撰「早春霞といへる心を　嘉陽門院越前」。　千家従五位―千家尊福。一八四五～一九一八。明治大正時代の神職、政治家。明治五年出雲大社大宮司、政府の大教正を兼任。尊福が従五位だったのは、明治五～一三年。風月小誌一号の出版が明治十三年四月なので、その年の早春に作られた一首か。この時期は、国家神道のあり方をめぐって、政府内で伊勢派と対立抗争していた（祭神論争）。のち、大教正から退き、十五年神道大社教をおこし初代管長となる。その後、貴族院議員、東京府知事、第一次西園寺内閣の法相などをつとめた。　はつかに―ほのかに。「わづかに」とは、本来は別語、のち混用。忠岑「春日野の雪間を分けて生ひ出でくる草のはつかに見えし君はも」。　にほふ―本来は色が映える、色に染まる視覚的な美。家持「春の苑紅にほふ桃の花下照道に出で立つ乙女」。ここは、視覚を超えた雰囲気のようなつもりで用いたか。　春の色―古今集「春の色の至り至らぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ」。興風「春霞色の千種に見えつるはたなびく山の花のかげかも」を意識して、具体的な花の色ではなく、眼に見えない感覚的な雰囲気を表している。　いつか―いつに

なったらみることができるだろうか。早くみたい願望を込める。古今集「我が宿の池の藤波咲きにけり山郭公いつかきなかむ」。　見てまし―（もしもできることならばちゃんと）みてしまいたいものだ。柿本集「春霞たなびく山の桜花早く見てまし散りすぎにけり」。伊勢「鶯に身をあひかへば散るまでもわが物にして花は見てまし」。

＊宗教界、さらには日本の未来における新展開に期待を寄せているのか。

2春雨　梅静逸　出雲松江人

おともなく　霞のまより　ふる雨を　庭の草葉の　色に見るかな

【大意】（はるさめ）音を立てず静かにかすみの中から雨が降ってきたことを、庭草の葉の色が変わったことで気が付いた。

【注釈】春雨―続後撰「春雨を　前関白左大臣」。　梅静逸―梅式膳（一八三五～一八九五）。出雲頭役四百石。静逸斎。智波也。森為泰門等。明治四年、松江母衣町に寺子屋を開く。後、美保関宮司。（森繁夫編中野荘次補訂『名家伝記資料集成』思文閣出版一九九一による）。　おともなく―小町「春雨のさはにふるごとおともなく人に知られで濡るる袖かな」。　霞のまより―貫之「山桜霞のまよりほのかにも見てし人こそこひしかりけれ」。　庭の草葉の―頼政「初霜の朝日にあへど消えぬかな庭の草葉やさえわたるらむ」。　色にみるかな―家隆「冬枯れし同じ野辺とも見えぬかな草葉の色も駒の景色も」。

3春曙　森古草　仝所人

よそめには　花かあらぬか　白雲の　葛城やまの　春のあけほの

【大意】（春のあけぼの）遠くからぼうっと見ていると、桜の花がさいているのかどうかわからない。白雲がかかる春の葛城山の明け方の姿。

【注釈】春曙―風雅「春曙を　九条左大臣女」。　森古草―不明。出雲の江戸から明治の国学者、歌人である森為泰

（一八一一～一八七五）の縁者か。　よそめ―それとなく見ること。為忠「よそめには峰の白雲むらぎゆるかづけるはなの見するなりけり」。　はなかあらぬか―道真「秋風の吹上にたてる白菊は花かあらぬか浪のよするか」。　葛城山―奈良県と大阪府との境に位置する山。伝人麻呂「青柳の葛城山にゐる雲のたちてもゐても君をこそ思へ」。葛城山の「か」に白雲が「かかる」を掛けている。　はるのあけほの―枕草子「春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山際、すこし明かりて、紫立ちたる雲のたなびきたる」。俊成「またや見む交野のみ野の桜狩り花の雪散る春のあけぼの」。

4春日遅　禎祥舎和男　木村氏　同所人

桜かり　野山のかきり　分来ても　餘るはるの　日影なりけり

【大意】（春の日は時間の経過が遅いように感じられる）桜を見物に、野山を足の及ぶ限り、雑草を分け入って散策したのだが、それでも春の日は暮れずにまだ残っているのだなあ。

【注釈】春日遅―新明題「春日遅　伊季」。　木村和男―蔵七。藤右衛門等。明治初年、出雲八束郡熊野神社宮司。松江藩士。中村守手、守臣門。松江藩召抱謡曲師範（『名家伝記資料集成』）。　禎祥舎―読み不明。禎祥は中庸「国家の將に興らんとするや、必ず禎祥有り」による。さちのや、さいわひのやの読みが考えられるが確証はない。桜かり―もとは鷹狩に付属する桜の木の下の宴会を指していたが、ひろく桜の花を尋ねて山野を歩き回ることを指すようになった。俊成「またや見む交野の御野の桜がり花の雪散る春の曙」。　分来ても―「わく」は、茂みなどをかき分けて来る。桜狩りの享楽を「分」けることも兼ねるか。多武峰少将物語「君がすむ山路に露やしげるらむわけくる人の袖のぬれぬる」。俊成「すみれ咲く浅茅が原をわけきてもただひとみちに物ぞかなしき」。　あまるは―宗家「人めをばつつむと思ふにせきかねて袖にあまるは涙なりけり」。順徳院「百敷や古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり」。

5待花　朱桜岡守手

春されは　吉野初瀬の　花暦　ひらきてまたぬ　日はなかりけり

【大意】（桜が開くのを待つ）春が来たら、吉野や初瀬の開花時期を示したこよみを開いて、待ち遠しく思わない日がないことだ。

【注釈】待花―新後撰「待花といふ事を　前関白太政大臣」。　朱桜岡守手―中村守手。既出。　春されは―「さる」は、季節や時刻を表す語に付いて「来る」、「なる」の意。憶良「春さればまづ咲くやどの梅の花ひとり見つつや春日暮らさむ」。　吉野―奈良県南部。古来桜の名所として歌に詠まれる。　初瀬―奈良県中部桜井市初瀬。古くは「はつせ」と呼ばれた。ここも名刹長谷寺を中心に桜で著名。芭蕉「うかれける人を初瀬の山桜」。　花暦―花を四季の順に並べて、花の咲く時節と名所を記して作った暦。近世語で歌語ではない。　またぬ日はなかりけり―家良「春霞立つを見しよりみ吉野の山の桜を待たぬ日はなし」。

6花本　本多確介　同所人

帰らむと　いひつゝ花の　木の本に　長居をしたり　妹や待らむ

【大意】（桜のねもと）すぐに帰ってくるよといいながら、桜のねもとにすわったまま長居してしまった。妻が待ち遠しくしていることであろう。

【注釈】花本―為尹千首「花本」。　本多確介―出雲、松江。大八洲歌集八に所収。（『名家伝記資料集成』）。花の木の本―定家「誰か住む野原の末の夕霞色迷はせる花の木の本」。　妹や待らむ―源広綱朝臣歌合「鹿の音を聞けばゆかれぬ山路かな遅く帰ると妹や待つらむ」。

7春山　千家直子　出雲杵築人

きのふかも　雪にかゝけし　玉たれの　外山の桜　はや咲にけり

【大意】（春の山）桜がまだ枝ばかりで雪の中に掲げた玉すだれのようであったのは、ごく最近、昨日のことであったかのようだったのに、今、向こうの山の桜はもう満開になっていることよ。

【注釈】春山―為尹千首「春山」。　千家直子―未調査。千家尊福の妹、千家奈保子（奈保とも。一八六四～一九四七）か。後、藤波言忠に嫁ぐ。　きのふかも―惟成「きのふかもあられふりしは信楽の外山のかすみ春めきにけり」。古今集「昨日こそ早苗取りしかいつのまに稲葉そよぎて秋風の吹く」。　外山の桜―祐円「信楽の外山の桜咲きにけり真木の梢に掛かる白雲」。匡房「高砂の尾の上の桜咲にけり外山の霞立たずもあらなむ」。　はや咲にけり―為兼「山桜早咲きにけり葛城や霞を掛けて匂ふ春風」。

8首夏　桂の岡秀年　中村氏　出雲松江人

常磐木の　古葉とともに　ちる露の　すゝしき夏に　成にける哉

【大意】（初夏）常緑樹の古い葉が落ちるとともにぱらぱらと散る露に涼しさを感じる夏になったことだなあ。

【注釈】首夏―続後撰「百首歌たてまつりし時、首夏　右近大将公相」。　中村秀年―出雲飯石郡掛合町寄寓（『名家伝記資料集成』）。　常盤木―常緑樹。松、杉が代表だが、ここはおそらくかしなどの常緑広葉樹。俳諧において常盤木落葉は初夏の季語。嵐雪「常磐木の散るや母さへその子さへ」。　ちる露のすゝしき夏に―涼しは夏の季語。俊成「夏の日も心の水を澄ませとや池の蓮に露の涼しき」。右兵衛督家歌合「空消えて涼しき夏の月影は夜の短きぞ秋に変われる」。

9水鶏　瓠の舎祐之　大河原氏　同所人

みなくちの　水のおとなひ　やゝ更て　青田の月に　水鶏鳴なり

【大意】（クイナ）田圃への注ぎ口で水が音を立てているところに、とっぷりと夜は更け、青田に月がうつる。そこにクイナの鳴く声がきこえる。

【注釈】水鶏―風雅「水鶏を　後伏見院御歌」。　大河原祐之―東京住、出雲松江市飯田町の人（『名家伝記資料集成』）。　みなくち―川をせきとめて田へ水を引き入れる口。みずくち。伊勢物語「みなくちに我や見ゆらんかはづさへ水の下にて諸声になく」。　おとなひ―音。引いて訪れる意。枕草子・心にくきもの「うちそよめく衣のおとなひなつかしう」。　やゝ更て―楊梅兼行「庭しろくさえたる月もややふけて西のかきねぞ影になりゆく」。　青田―稲が茂って青々と見える田。歌語ではない。夏の季語。蕪村「山々を低く覚ゆる青田かな」。　水鶏―水辺にすむ鳥の名。俳諧では夏の季語。鳴き声が戸をたたく音に似ているので、くいなが鳴くことを「たたく」という。永福門院「かげ繁き木の下闇の暗き夜に水の音してくひな鳴くなり」。

10 川蛍　**松の岡幸雄**　**丹羽氏**　**同所人**

桂　川　**七瀬の淀も**　**よとみなく**　**影をなかして**　**ゆくほたるかな**

【大意】（川のホタル）桂川のいくつもある浅瀬のよどんだ水の上においても、よどみ停滞することなく、光をなめらかに流してゆく蛍であることよ。

【注釈】丹羽幸雄―未調査。　川蛍―大江戸「川蛍　百枝　稲葉」。　桂川―京都市南西部を南流する川。上流は大堰川，保津川と呼ばれ，嵐山付近から桂川となって京都盆地へ流れ出たのち，鴨川を合わせ、大阪府近くで宇治川，木津川とともに淀川に合流する。　七瀬―七つの瀬。数多くの瀬。旅人「松浦川七瀬の淀は淀むとも我は淀まず君をし待たむ」。　よどみなく―恵慶「よどみなく波路に通ふ海人舟は何処を宿とさしてゆくらむ」。　ゆくほたるかな―俊頼「芦の屋のひまほのぼのと白むまでもえあかしてもゆくほたるかな」。

11 扇　**吉城たに子**　**同所人**

手にならす　**扇の風の**　**なかりせは**　**夏の暑を**　**如何にしてまし**

【大意】手に親しんでしっくりとくるこの扇であおぐ風がなかったら、この夏の暑さはどうしようもないよ。

【注釈】扇―『和漢朗詠集』夏に「扇」の項あり。　吉城たに子―吉城たか女の誤刻か。出雲藩、吉城十右衛門女（『名家伝記資料集成』）。　手にならす―ならすは、慣れ親しませること。源氏物語・空蟬「かの薄衣は、…身近くならして」。赤染衛門「手にならす扇の風を添へたらばあゆく草葉につけて忘るな」。

12 荻　　**桃李園年長　増田氏　同所人**

夢をはむ　獣や荻に　やとりけむ　そよけはさむる　夜はの手枕

【大意】（荻）夢を食べる獏が荻に住んでいるのだろうか。風がそよいで荻の音がすると、あなたの手枕でぐっすりと寝ていたのがさめてしまう。

【注釈】荻―イネ科の多年草。各地の池辺、河岸などの湿地に群生して生える。和歌では、この首のように、荻が風に吹かれた音で夜目が覚めて、秋の寂しさを感じるパターンが多い。また、「招ぐ」に通じて、恋人の訪れを夢見させる音としても詠まれる。ここでは、逆に恋の夢を破るようにわざとちぐはぐに作ってある。万葉「葦辺なる荻の葉さやぎ秋風の吹き来るなへに雁鳴き渡る」。後撰「いとどしく物思ふやどの荻の葉に秋とつげつる風のわびしさ」。新続古今「荻を　前大僧正道意寺」。　増田年長―平内。善蔵。出雲森為泰門等。番頭役。嘉永、安政年度、出雲藩国学所に於いて森為泰と共に教示上席たり（『名家伝記資料集成』）。　夢を食む獏―日本では中世より、夢を食べる獏の代表は獏であるとされる。中国の想像上の幻獏獏には、悪夢を払うことはあっても、夢を食べる習性はない。夢を食べるという伯奇なる幻獏と混同されたという説がある。　夜はの手枕―周防内侍「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ」。続千載集「秋深き床の山風身に染みて月影寒き夜半の手枕」。

13 秋野　　**坪内鹿子　出雲杵築人**

露しけき　秋のはなの、　夕くれは　虫の声さへ　千種なりけり

【大意】（秋の野原）露がたくさん落ちている、秋の草の花がいろいろと咲く野原の夕暮れは、それら様々な花にあ

わせて虫の音までも様々な音色をたてていることだ。

【注釈】秋野―『夫木和歌集』に「秋野」の項あり。　坪内鹿子―不明。坪内昌成の縁者か。昌成は、出雲杵築、大社上官、通称早太夫、（千家）俊信門の歌人（『名家伝記資料集成』）。その息子の忠臣も歌人（同書）。　露しけき―源氏物語・帚木「荒れたる家の露しげきを眺めて、虫の音に競へるけしき、昔物語めきておぼえはべりし」。紫式部「露しげきよもぎが中の虫の音をおぼろけにてや人の尋ねむ」。　はなの―秋草の咲く野。秋の季語。万葉集「秋萩の花野の薄穂には出でず吾が恋ひわたる隠妻はも」。　千種―清んで「ちくさ」とも。様々の草。引いて、様々な種類。恋をして様々に思い悩む気持を暗示するか。貫之「秋の野に乱れて咲ける花の色のちぐさに物を思ふころかな」。

14水辺萩　多豆の舎外弘　内部　出雲松江人

五月雨に　岸うちくえし　谷川の　岩間にさける　萩のひともと【くえしはもとくゑしに作る。今改む】

【大意】（水辺の萩）梅雨の大水に岸が崩されている谷川の岩と岩の間に萩の花が一本咲いていることよ。

【注釈】水辺萩―夫木「家集、水辺萩　同（源仲正）」。　内部外弘―一八四一～一八九七。寛郷。松江藩士。通称林蔵。中村守手門。国学教授、権大教正。墓所、松江清光院。松江藩唯一の国学者。草仮名の妙手。歌文をとどむること多し（『名家伝記資料集成』）。　うちくえし―「くえ」は、「崩ゆ」。崩れる。朽ちる。坂上郎女「うるはしと我が思ふ心速川の塞きに塞くともなほや崩えなむ」。　岩間にさける―兼盛「谷川の岩間を分けて行く水の音にのみやは聞かむと思ひし」。俊頼「山川の岩間のさきのひたすらに忍びしふしはあらはれにけり」。　萩のひともと―肖柏「夏草の野辺の茂みに埋もれても露もてはやす萩のひともと」。

15題しらす　佐々木喜蔭　伯耆米子人

夕　月夜　田中の松も　みえそめて　鳴たつかたは　露はれにけり【みえはもとみゑに、鳴はもと鴨に作る。二号

附正誤にゑハえノ誤、鴨ハ鳴ノ誤という。今改む】

【大意】（無題）夕方、月が照ると、それまで見えなかった田圃に生えている松がだんだんと見えてきて、鳴が静かに立っているすがたも浮き上がってきた。

【注釈】題しらす―『古今』より「題しらず」の詞書あり。　佐々木喜蔭―通称出羽守。伯耆米子町勝田神社神官。飯田秀雄、年平門。正六位（『名家伝記資料集成』）。　伯耆国米子―明治九年から十四年まで、現島根県と現鳥取県で島根県を構成していた（いわゆる大島根県）。したがって、現鳥取県米子は、当時の島根県に属する。　田中の松―良寛「岩室の田中の松を今朝見れば時雨の雨に濡れつつ立てり」。　みえそめて―伏見院「春の色は柳の上に見えそめて霞むものから空ぞ寒けき」。　鳴たつ―西行「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮れ」を意識する。「たつ」に「立ち尽くす」と「飛び立つ」の両解釈があるが、前者であろう。静かな夜に鳴も眠りについているのである。　露はれにけり―古今「池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれどあらはれにけり」。

16　十五夜　佐夜の中山にて　楓の園洞貝　細野氏　出雲広瀬人　八十二翁

月影の　さやの中山　名にしおふ　こよひこゆるも　命なりけり

【大意】（おりしも十五夜の満月。佐夜の中山で）月の光にさやかに見える佐夜の中山、西行が詠んだ通りすばらしい。今夜（西行が予言歌どおり死んだという）満月の日に越えるのも、命ながらえてこれまで生きてこられたからだなあ。何たるわが人生。

【注釈】十五夜―『和漢朗詠集』秋に「十五夜」の項あり。ここは二月十五夜。あるいは季節を限るまい。　細野洞貝―細野安恭。通称宮市、洞貝。出雲広瀬家士。明治初年の人。芳章門、千家清主、尊孫門。藩校皇学訓導（『名家伝記資料集成』）。　十五夜―西行「願はくは花の下にて春死なむその如月の望月のころ」を意識する。西行は実際に二月十五夜のころに死んだという。　佐夜の中山―静岡県掛川市の坂道。東海道の難所。西行の歌で有名。「小夜」とも表記するが、「さよ」、「さや」両様の読みが古来ある。ここは「さや」で、月影が「さや」かであること

に掛ける。西行「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」。　名にしおふ―「名に負ふ」に同じ。「し」は強意。名に実態が伴うこと。ここでは西行の歌で著名であること。業平「名にしおはばいざこととはむ都鳥わが思ふ人は有りやなしやと」。　命なりけり―前注所引西行の歌による。寿命の意であるが、天命、運命の意も兼ねよう。

17月照紅葉　桃の舎標樹　森氏　出雲松江人

山の端の　月は紅葉に　もみちはは　月に光を　そふるなりけり

【大意】（月がモミジを照らす様）山のはしに出てきた月がモミジに、モミジの葉の方も月に、お互いに輝きをましあっているのだなあ、

【注釈】月照紅葉―この結題、及び作は、忠岑「久方の月の桂も秋は猶もみぢすればやてりまさるらむ」を意識するであろう。千載「月照紅葉といへる心を　をのこどもつかうまつりける時、よませ給うける　（後白河）院御製　紅葉ばに月の光をさしそへてこれやあかぢの錦なるらん」。「月照紅葉」の結題は平仄の関係から、漢詩からの摘句ではないと思われる。　森標樹―未調査。前述森為泰関係者か。　山の端の月―清輔「出づるより冴えてぞみゆる木枯らしの紅葉吹き下ろす山の端の月」。　光をそふるなりけり―正徹「嶺わたる月に光をそへてけりうらよりしろき椎の葉の霜」。

18寒月　蓬生園與平　桂田氏　同所人【與字不鮮明】

笹のはの　さやく霜夜の　月影は　水なき空の　こほりなりけり

【大意】（いてついた月）笹の葉がさやさやとなる霜が降る寒い夜、その時の月影は水のない天界のこおりにあたるものなのだ。

【注釈】寒月―新続古今「応永十四年内裏三首歌合に、寒月　紹宏院贈内大臣」。　桂田與平―未調査。『名家伝記

資料集成』所載の桂田元生その人または縁者か。出雲藩、称武五郎。　笹のはのさやく霜夜―古今「賢しらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜を我がひとり寝る」。「さやぐ」はさわさわと音を立てる。「笹」に続く「さ」音の連続。水なき空の―貫之「桜花散りぬる風のなごりには水なき空に浪ぞたちける」。　こほり―正徹「春日影水なき空のこほりをもとくや草木におつる朝露」。

19閑庭雪　苅穂の舎富穂　寺田氏　同所人

しつけさを　心とすめる　庵なれは　つもらは積れ　庭のしら雪

【大意】（静かな庭の雪）静かなことを第一に心がけて住んでいるいおりなので、庭に白雪がつもるならつもってかまいません。むしろ本望。

【注釈】閑庭雪―隆祐「閑庭雪　とへかしな跡もいとはでまたれけりまだそらはれぬ庭のしら雪」。　寺田富穂―寺田弍徳その人または縁者か。松江藩士、平八郎、初名成終、後弍貞。尊孫門（『名家伝記資料集成』）。　心とすめる―村田春海「訪はれぬを心とすめる室の戸に人まつ虫やたれにならへる」。　つもらは積れ庭のしら雪―寂然「尋ね来て道踏み分ける人もあらじ幾重も積もれ庭の白雪」。後宇田院「消ぬがうへに積もらば積もれ降る雪の蓑代衣打ちも払わじ」。

20夕恋　岡の舎豊年　岡田氏　同所人

暮ぬとて　家鳩つかひ　帰り来し　軒のつまこそ　恋しかりけれ

【大意】（夕方の恋）暮れてしまったというので、つがいの家鳩が連れ立って帰ってきた、その軒のつま（端）がなんとも恋しくてたまらない。なぜならその家には我がつま（妻）がいるから。

【注釈】夕恋―新古今「夕恋といふ事をよみ侍りける　藤原秀能」。　岡田豊年―通称権七。出雲藩、松江。芳久門（『名家伝記資料集成』）。　暮ぬとて―業平「暮れぬとて寝てゆくべくもあらなくにたどるたどるもかへるまされ

り」。　家鳩―家禽化した鳩。どばと。飼いばと。源氏・夕顔「竹の中に、いへばといふ鳥の、ふつつかに鳴くを」。　つかひ―つが（番）ふ。（二つのものが）組になる。対になる。紫式部日記「うち払ふ友なきころの寝覚めにはつがひし鴛鴦ぞ夜半に恋しき」。　軒のつま―「妻（つま）」と「端（つま）」を掛ける。公任「けふことにのきのつまなる菖蒲草七夕つめに劣らざりけり」。

21　涙　　中村久慶　同所人

嬉しさに　たへぬ涙も　あるものを　憂にのみとは　何思ひけむ

【大意】（涙）うれしくてしょうがなくて我慢できずに流す涙もあるのだ。それなのに、悲しいときだけ涙が出るなんて嘗て思ったのはなんだったんだろう。

【注釈】涙―和歌一字抄「涙　二条后」。　中村久慶―出雲松江として『名家伝記資料集成』に記載。　嬉しさにたへぬ涙―赤染衛門「草わけて立ちゐる袖のうれしさにたへず涙の露ぞこぼるる」。　憂にのみとは―道因「思ひわびさても命はあるものを憂きに堪へぬは涙なりけり」。続古今「憂きにのみ袖をや濡らす秋の月心すむにも涙落ちけり」。　何思ひけむ―たひらけい子「たえぬとも何思ひけん涙河流れあふせも有りけるものを」。

22　寄燈恋　　千樹園守夫　仙田氏　同所人

わか影を　ひとりみる夜は　中〳〵に　ありて淋しき　ねやの燈

【大意】（ともしびを題材にして恋を詠む）自分の影を一人ぽっちでみる夜は、寝室にあかりがあるのはかえって寂しい感じがする。

【注釈】寄燈恋―時広「寄燈恋　まちかぬる宵の灯火掲げてもつれなき人は影をだに見ず」。　仙田守夫―出雲松江藩士。一八三七～一九〇九。森為泰門。明治初年、宗匠たり。著名。明治十三年勅題歌預選（『名家伝記資料集成』）。芦田耕一島根大学名誉教授「仙田守夫」（『「出雲歌壇」覚書』（私家版二〇一一）所収。もと山陰中央新

報二〇〇〇・十一・五記事）によれば、おりしも本書発行の年、明治十三年の宮中歌会始において、一般人として史上はじめて和歌が選ばれている。　わが影をひとりみる夜は―陸機・洛に赴く道中の作「影を顧みて悽として自ら憐れむ」。　ありて淋しきねやの燈―光俊「灯火の消えての後に寄り臥せば我が影をだに見るよしもなし」。下野「宿は荒れて風の隙もる山蔭にそむけかねたる閨の灯」。

23天象　松樹園美蔭　園氏　西京人
国といふ　国のはてまで　行雲の　あめの道こそ　限りしられね

【大意】（天の姿）国というあらゆる国のそのはてまで飛んでいく雲、その雲が天空にたどる道は無限に続いている。

【注釈】天象―天のシンボル。多くは星を指すが、ここでは雲など気象も含むらしい。易・繫辞伝「天象を垂れ吉凶を見わす」。書・胤征「天象に昏迷たり」。『夫木和歌集』に「天象」の項あり。　園美蔭―一八一七～一八九四。江戸後期から明治時代の歌人。京都の人。近江津にすむ。歌道の興隆につとめ、渡忠秋、拝郷蓮茵らとならび称された。明治二十七年五月十五日死去。七十八歳。京都出身。号は松樹園（講談社『日本人名大辞典』、『名家伝記資料集成』）。　行雲―万葉集「白真弓今春山に行く雲の行きや別れむ恋しきものを」。小野滋蔭「葦引の山たちはなれ行く雲の宿り定めぬ世にこそ有りけれ」。　あめの道―天体が運行する道。ひいて天理。　限りしられね―顕輔「昨日見ししのぶもぢずり誰ならむ心の程ぞ限り知られぬ」。

24山路にて　梅見岡須数舞　笠原氏　出雲松江人
岩根ふむ　山路こゝしみ　見かへれは　思ひし程は　登らざり鳧

【大意】（山路で）岩をふんで進む山道があまりに険しい。それで、下を顧みると、思ったほどには上っていなかったのか。

【注釈】山路にて―千載「高野にまうで侍りける時、山路にてよみ侍りける　仁和寺法親王守覚」。　岩根―どっしりと根を据えた大きな岩。いわがね。いわお。家持「白雲のたなびく山を岩根踏み越えへなりなば」、同「あしひきの岩根こごしみ菅の根を引かばかたみと標のみぞ結ふ」。　こごし―山道などで、岩がごつごつと重なって険しい。長屋王「磐が根のこごしき山を越えかねて哭には泣くとも色に出でめやも」。　思ひし程は―定家「恋ひ恋ひて思ひし程はえぞなれぬただ時のまの逢ふ名ばかりは」。

25 山家井　稲見の舎義雄　落合氏　同所人

世をうしと　思ひいりしは　山の井の　みつから浅き　心也けり

【大意】（山の中の家にある井戸）世の中をつらいと思いこんで（世を捨てて）いたのは、山の井戸水のような、人のせいでなく自ら選んだ浅はかな心性であったことよ。

【注釈】山家―山中にある家。世捨て人を連想させる。藤原為実「山家には栖のから葉の散り敷きて時雨の音も激しかりけり」。十市遠忠『日次詠草』に「山家井」の歌題あり。　落合義雄―未調査。　世をうしと―喜撰「わが庵は都のたつみしかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり」。高倉「世をうしと慣れし都は別れにき何処の山をとまりともなし」。　思ひいりしは―深く思い込む。重之「誰故に思ひ入にし山路とてかへりごとだに言はれざるらむ」。俗世を離れて「山」に「入る」ことも掛けているであろう。　山の井―山中の、湧水をたたえたところ。掘井戸に対して、それが浅いところから、和歌では「浅い」の序詞の一部としても用いる。万葉「安積山影さへ見ゆる山の井の浅き心を我が思はなくに」。貫之「むすぶ手のしづくに濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな」。

26 関屋　蓑虫庵小石　根岸氏　同所人

夜さへも　往来の人の　たえぬ哉　戸さゝぬ御代に　逢　阪のせき【たえぬはもとたゑぬに作る。二号附正誤にゑハえノ誤という。今これによって改む】

【大意】（関屋）昼はもちろん夜までも人々の往来がたえない。関所を設けず、平和で自由に人々が移動できるすばらしい時代の逢坂の関だ。

【注釈】関屋―関守の番小屋。また、関所の建物。蜻蛉日記「逢坂のせき屋なになりちかけれどこえわびぬればなげきてぞふる」。源氏物語・関屋「女（空蝉）　行くと来とせきとめがたき涙をや絶えぬ清水と人は見るらむ」。良経「人住まぬ不破の関屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風」。大江戸「関屋　飛弾守忠英中川」。　根岸小石―称文五郎。松江。軽舟子。守手門（『名家伝記資料集成』）。　往来の人―新後拾遺集「逢坂は関のとざしもなかりけりゆききの人を花に任せて」。　戸さゝぬ御代に―家隆「ただ暮れね関のとざさぬころなれば月にも越えむ足柄の山」。為世「いづかたも関のとざさぬ御代にあひて今我が道ぞ末通りぬる」。

＊蝉丸「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」が念頭にあるだろう。維新後交通が自由になり、人の往来が激しくなったことを受ける。

27 新聞　羽山繁樹　同所人

開けゆく　御代のしるしは　月に日に　耳新しき　事のみそきく

【大意】（新聞）開化の時代の象徴として、毎月毎日これまで聞いたこともないようなことを聞いてばかりいるこのころ。

【注釈】新聞―江戸時代のかわら版を前史とし、国内初の日本語日刊紙「横浜毎日新聞」の誕生（明治三年）を経て、新聞が大きく発展。当然従来の歌題にはない明治新題。島根県では、明治六年島根新聞誌発刊、まもなく廃刊。明治十二年、松江新聞発刊。明治十五年山陰新聞が引き継ぐ。この歌の新聞は、松江新聞を指す可能性が高い。他地域の新聞ではあるまい。　羽山繁樹―平八郎。雲藩士列頭。鎗術大家。三百石。為泰門。八十九翁自筆短冊あり。足軽より出て、士大将となれり。明治初年大橋渡り初をなせり（『名家伝記資料集成』）。　開けゆく―古語としては、次々と開花してゆく。咲き移ってゆく。源氏・胡蝶「廊をめぐれる藤の色も、こまやかにひらけゆきにけり」。

ここでは、文明「開化」になぞらえた。開化新題歌集・馬車「ひらけゆく世の魁の馬くるま心ののらぬ人なかりけり〈清生〉」。　御代のしるし―実氏「治まれる御代のしるしと山里に心のどけき花を見るかな」。　月に日に―大伴像見「春日野に朝居る雲のしくしくに吾は恋ます月に日に異に」。　耳新しき―「あたらし」は、本来は「惜しい」の意。古語ならば「あらたしき」と訓ずるべきところ。ここは、近世語をわざと用いて、新時代の雰囲気に合わせたのであろう。

28人力車　　樫の舎勇雄　水谷氏　同所人

小夜更て　きしる車の　音すなり　誰か夢路を　ひかれゆくらむ

【大意】夜更けに人力車がぎしぎしと音をたてているのが聞こえる。夢の道をひかれてゆくのはどんな人だろう、

【注釈】人力車―明治初年に日本で発明された、人の力で人を輸送するために設計された車。これも明治新題である。　水谷勇雄―未調査。漢詩をよくした水谷渓窓の縁者か。『出雲詩綜』の小伝によれば、「国富の人、大正九年没す、年八十也」。　樫の舎―「樫」は「かわやなぎ」の訓もあるが、和歌ではもっぱら「むろのき（室の木）」。「むろのき」は「ねず」の古名という。万葉集「吾妹子が見し鞆の浦の天木香樹(むろのき)は常世にあれど見し人そなき」。源宰相「磯樫　あら磯や岩ねにたてるむろのきのこだちも見えず塩やみつらん」。　小夜更て―「さ」は接頭語。大伯皇女「わが背子を大和へ遣るとさ夜深けて暁露にわが立ち濡れし」。　夢路―貫之「夢ぢにも露やおくらん夜もすがらかよへる袖のひぢてかわかぬ」。　正徹・六月祓「水無月の七瀬川原のから蓬流す麻にやひかれ行くらん」。

＊人力車にひかれている人も転寝して夢をみているだろうと思うが、思う自分も夢かうつつかわからぬ状態。

29寄菓述懐　　戸田忠幸　同所人

世中に　あるかひもなき　実無栗　なり出しこそ　悔しかりけれ

【大意】（果物の栗に寄せて自分の気持ちをのべる）世の中に存在する価値もない実のない栗、そんなふうになってしまった（うわべは立派でも役に立たない人間になってしまった）自分を後悔しても後悔しきれぬ。

【注釈】菓―今の菓子ではない。本来は、果物、生り物。万葉集「大和の室生の毛桃本繁く言ひてしものをならずはやまじ　右一首、寄菓喩思」。　述懐―古今集真名序「可以述懐」。金葉「百首歌中に述懐の心をよめる　源俊頼朝臣」。中国詩では、張載（文選所載）作等、ごく普通にみられる詩題。　戸田忠幸―出雲大社神官。住東京。称孫市。尊福の妹婿。撃剣家（『名家伝記資料集成』）。この時は出雲大社で神官を務めていたか。　世中にあるかひもなき―古今「あしひきの山のまにまに隠れなむうき世の中はあるかひもなし」。　実無栗―殻ばかりで、中に実のない栗。俊頼「みなしぐりくち葉がしたに」　なり出しこそ―「なりいづ」は、生まれる、成長するのが原義だが、世俗的に立身出世する意にもひろがる。枕草子「男はなほ若き身のなりいづるぞいとめでたきかし」。

＊謙遜、自信喪失、出家隠遁の希求、世俗の実を伴わぬ権威への批判等、さまざまにとれるように作ってある。

30 富蘭克林（フランクリン）　中村守丘（なかむらもりおか）　同所人（どうしょのひと）

心（こころ）ありて　あけ（げ）にし紙鳶（たこ）の　絲（いと）よりや　名（な）も海山（うみやま）を　伝（つた）へ（え）きにけむ

【大意】（フランクリン）周到な用意をもってあげた凧の糸から電気を発見して、その名は海山を超えて、全世界に広がったのであろうか。

【注釈】富蘭克林―ベンジャミン・フランクリン。一七〇六～一七九〇。米国の政治家、科学者。凧を用いた実験で、雷が電気であることを明らかにしたことで知られる。日本において、彼の業績はつとに江戸時代からよく知られていたようである（例えば、平賀源内のエレキテル等）。明治初期の物理教科書『改正増補物理階梯』（一八七六）に「富蘭克林」の表記で彼の雷の実験が紹介されている。　中村守丘―中村守手二男（『名家伝記資料集成』）。心ありて―思いやりがあって風流心がある。無心ではなく意図するところがある。ここでは、凧遊びをする風流なうわべと、化学探求の意志の両方にとれるようにしている。貫之「心有りて鳴きもしつるかひぐらしのいづれもものの

あきてうければ」。　紙鳶―漢語としては古来用いられるが、たこ（またはいか）の読みは、近世まで現れない。歌語ではない。　海山を―万葉集「雲居なる海山越えてい行きなば我れは恋ひむな後は逢ひぬとも」。

31 承久帝の皇居跡　桜か本吉雄　山田氏　東京人

しのふにも　なほあまりある　昔かな　あはれ涙の　玉しきの庭

【大意】（後鳥羽上皇行宮遺跡）忍んでも、なお忍びきれないおおむかしであることよ。ああ、涙を玉と散らされたであろうそのお庭。

【注釈】承久帝―承久の変で隠岐に流された後鳥羽上皇とみてよいであろう。後醍醐天皇の延元帝のように、確定した呼称ではない。ほかにも、承久年間の順徳天皇（また九条廃帝仲恭天皇、後堀川天皇）が考えられるが、承久の変の主役である後鳥羽と考える。山田吉雄が県警察部長として、隠岐を訪問した（未確認）時の作ではないか。もっとも、この歌のもととなった「百敷や古き軒端のしのぶにもなほあまりある昔なりけり」の歌で有名な順徳天皇（院）を指す可能性は残る。その場合は、皇居跡は順徳が承久の変後配流された佐渡島の黒木御所ということになる　皇居跡―現海士町。隠岐の島島前中の島後鳥羽上皇行在所跡。旧源福寺（廃仏毀釈で全焼）。近くに後鳥羽上皇御火葬塚もある。　山田吉雄―明治初期の文学者、言文一致体の先駆者山田美妙の父。この時、妻子を東京に残して、初代島根県警察部長（『官員録』（一八七九、八一）等）に赴任。『名家伝記資料集成』には、前長野県警部長、南部盛岡人、愛知県名古屋県警部長とある。　しのふにもなほあまりある昔―前注の順徳院の歌を典故とする。ただし、順徳院の歌は「忍草」と「しのぶ」を掛けているが、こちらは「忍草」は念頭にないであろう。　あはれ涙の―頼実「いかばかり思ふとしりてつらからんあはれ涙の色をみせばや」。涙は玉の枕詞でもある。　玉しきの庭―玉を敷いたように美しい庭。為氏「雲の上の有明の月も影冴えてふるや霰の玉敷の庭」。

32風月小誌のなれるを　琴の舎正雄

花細し桜がもとのふかみ草ふかき色香をしるひともかな

【大意】（風月小誌完成に際して）美しい花が咲いた桜の根本のふかみ草のように深い色香がこの雑誌に漂っているのを感じ取ってくれる人がいれば幸いである。

【注釈】村上正雄―前出。本書編集者の一人。主に和歌担当か。　花細し―万葉集「花細し葦垣越しにただ一目相見し子ゆゑ千たび嘆きつ」。「くはし」は繊細な美しさ。　桜がもと―家長「薄曇り桜がもとに風絶えてこのもとちらぬまりのおとかな」。　ふかみ草―諸説あるが、歌語においては、牡丹の別名。橘俊綱「君を我がおもふ心のふかみぐさ花のさかりにくる人もなし」、賀茂重保「人しれず思ふ心は深見草花咲きてこそ色に出でけれ」。しばしば思いが「深い」ことに掛けて用いる。　色香―色と香りだが、女性の美しさ、文学における精神性の高さをも暗示する。素性「よそにのみあはれとぞみし梅の花あかぬ色香は折りてなりけり」。覚助「梅の花深き色香に咲きにけり御代の時しる人に待たれて」。服部土芳『三冊子』「師の心をわりなく探れば、其色香わが心の匂ひとなりてうつる也」。しるひともかな―貫之「山里に知る人もがな郭公鳴きぬと聞かば告げに来るがに」、公経「飛鳥川淵瀬も分かず底清き水の心を知る人もがな」。

【奥付】

明治十三年四月御届

同年同月出版

編輯兼出版人　嶋根県士族　平賀半助

同　同県士族　勝田千之助　同国松江南田町

同　同県士族　村上正雄　同国松江奥谷町

出雲国松江内中原町

発兌人　　**同県平民**　　**一年舎**　　**同国松江天神町**

【注釈】平賀半助―静遠。既出。　勝田千之助―睡仙。既出。　村上―琴舎。既出。　一年舎―槙説山。松江の人。書肆を業とし、一年舎と号す。明治十五六年の交に没す。年六十余也（入谷仙介著「横山耐雪著出雲詩綜小伝(訳)」アジアの歴史と文化一巻による）。山陰新聞の訃報広告により、明治十六年に亡くなったことがわかる。

〔付記〕本稿は、
科研費基盤研究（C）研究課題/領域番号22K00340
近代漢詩が形成する山陰地域の文化教養環境―漢詩人と官僚・政党政治家の交遊の分析（期間　二〇二二～二〇二四年度　研究代表者　要木純一）
及び、
島根大学法文学部山陰研究センター―　山陰研究共同プロジェクト　近代山陰地域の文化教養環境における漢詩文の位置―若槻克堂と剪淞吟社の学際的研究（課題番号　二二一三　期間二〇二二～二〇二四年度　研究代表者要木純一）
及び
島根大学法文学部山陰研究センター―　山陰研究プロジェクト　山陰の文学・歴史関係資料の基礎的調査研究と発信・公開に関するプロジェクト（課題番号　二二〇五　期間：二〇二二～二〇二四年度　研究代表者　田中則雄）
による成果の一部である。